

中国における肖像画と文学

小川陽一

(一) 中国の肖像画とその歴史

只今、色々ご紹介いただきましてありがとうございます。更に本日はこんなに盛大な形になるとは思っておりませんで、普通の発表の一員のつもりでいたんですけれども、だんだんどうもそうでもなくなって、いろいろプレゼントされたり、いろいろお言葉を賜ったり、お花を賜ったりしてこれは困っているところでございます。本日お話し上げますのは、お手元にA3が一枚A4が二枚の、この資料に基づいてお話し上げたいと思います。

それで、話の要点はですね、あまりこれは問題にされなかったことで、もちろん中国に肖像画が伝統的にあり、それが中国絵画史の一分野を占めているということは常識なんですけれども、それが文学との関わりで考察されるというところは、私は今までそういう本やら研究を拝見したことが無かったわけです。ところが、先ほどの三浦先生のご資料の中にも何枚目でしたかね、絵画の部分、今日の発表の一番最後に取りましたけれども絵画の部分を紹介したところがありました。その中に絵の描き方の部分の中で肖像画を描いている時の場面があって、中国日用類書という生活百科事典の中に、肖像画の描き方まで書いてあるというくらい、この日用類書というものが中国人の生活あるいは文化に浸透して

いたんだということをまず申し上げたいと思うんです。

そうであればそれが中国の小説あるいは文学というものは、大変に日常生活との関わりが非常に非常に深いという特色をもっていて、まあ大変に日常生活と関わらない作品はないわけで、世界的にみんなそうですけれども、特に中国の小説・戯曲、詩もそうだと思いますけれども、やはり日常生活との関わりで作られ、したがってその関わりで考えていかなないと本当は理解できないだろうという風に私はかねがね考えておりました、小説を読むときにもそういう視点で取り上げる、その場合に日常生活といっても今から三百年も四百年も千年も昔の日常生活がお前わかるのかと言われるれば当然わからないわけで、その時にこれが日常生活だと言うものがないのかなと考えた末、その方法としては二つあって、その一つはお墓の中にいるその当時の中国の人たちに生き返ってもらって教えてもらうのが、一つ。

しかし、それが無理であればもう一つは我々がタイムトリップして、明代なり清代なりに潜り込んで検討してくる。それも無理であると言ふことになる、やはり文献を使うしかないだろうと。その文献として日用類書というものに十年あまり前、十数年前に着目をして今日に至っているわけです。本日もそういう状況の中で肖像画というものが、この資料の一番目のようにですね、中国絵画の一部門として人物画というものがございました。それが、肖像画として中国では伝神と言う形で、そういう言い方をしますけれども、それで日常生活に浸透しているということであれば、それが文学と非常に深い関わりがあるのではないのかという言うことが今日の話の要点でございます。その結果、これは大変深い関わりがあって、小説特に戯曲などは大変それと深い関わりがある。それだけではなくて、詩にも笑い話にも全部関わっているんだということをお願いしたいのが、本日の内容でございます。

今までお話いただいた何人かのご発表のようにきちんとした精緻な発表ではなくて、大風呂敷なずさんな話で大変申し訳ないのですけれども、講演ということでお許しただきたいという風に思います。

それでは、お手元に今申し上げた、途中まで見ました中国の肖像画の歴史といえますと、これは『漢書』、前漢の元帝の頃、紀元前一世紀頃に王昭君の話にまでさかのぼりますし、もっと肖像画そのものだところまで遡るかわからないぐらい遡るはずのものでございます。壁画等にも残っているものですね。そういう肖像画の中で、人物画・山水画あるいは花鳥画、花卉画、の一部門として人物画がございました。人物画の一部門として肖像画が伝神と言われてきましたけれども、中国でももちろん肖像画と言いつ方も使っております。その他、伝影・写真、今日使うカメラの写真は本来ここからきていると思えますけれども写真、真容・凶像・寿相、寿相の意味はあとでまた申し上げますが、長生きの人相画のことですけれども、行楽図・掲帛・追影その他二十種類近い肖像画をあらわす言葉がございます。日本ではそんなにたくさんない。肖像画・似顔絵・似せ絵、あとは遺影。遺影は死んだ後のものですね。本当に数が少ない。それに比べて中国語で肖像画を意味する表現、もちろんそれは含んでいる言葉の意味、地域性、時代性、そういうものがありますから、全く百パーセント同じ言葉の言い換えではありませんけれども、その言葉の数は二十ではきかないくらいだろうと思うのです。その位多様であるということは、つまりそれだけ生活で多方面に多様にしかも長い間これが使われてきた、とすることを表しているのだろうと思うのです。

それで、人物画の中で中国の古代人物画というのは仏像とか歴史上の人物とか、そういうのを含んでおりますから、人物画イコール肖像画というわけではありません。肖像画は人物画の中の一部門であります。人物画というのは、人間の普遍性、今日で言えば人間の普遍性を追求する裸体画でも、あるいは老人でも農民の絵でもある個人を描くのではなくて、人間のある側面を追及していく。その人間の普遍性を追求しているわけですね。それに対して肖像画と言いますとこれは、特定人物といいましたけれども、ある固有名詞をもった人物の「絵」であるわけで、その人の個性の追求ということが肖像画の今日的意味ですけれども、中国でもそうです。だから、伝神というわけで、その精神・心ま

で伝えるような外形的な形プラスその精神をあらわしたものの、これが伝神であって、もっとも優れた肖像画というのは単に、その人の顔かたちが似ているというよりも、精神まで生き様まで精神状況まであらわしている。そういうのが、理想的な肖像画である。こういいますから、まさに今日の肖像画と全く同じものがすでに唐代には確立していて、そして、以後人物画というのは廃れていきますけれども、肖像画は逆に社会経済の発展に伴って、絵は特に金がかかりますから、経済的な余裕がでてくる明清になってくると非常にこれが発展していく。ただし、芸術的な面ではなくて、実用的な面で大きな広がりを見せていくということになります。

そうしてその中国における肖像画の展開というのは、もちろん今でも油絵による、中国画による肖像画はもちろんありますけれども。日本でも現在油絵で、水彩画で肖像画をもちろん描きますけれども、それよりもカメラが普及したり、あるいはデジカメ等になりますとそちらに取って代わられて、安く簡単にできるようになりますから、絵による肖像画というのは中国も二十世紀に入ると急速に廃れて、日本と同じような状況で美術的な意味で残っているというだけになってしまいました。しかし、そこに至る長い間主役として肖像画が絵によって伝えられてきたという経緯がございます。その肖像画の社会的、何のために肖像画を描くのか、肖像画の目的・社会的役割は何であるかということを考えますと、資料の方にその辺のことが書いてあります。一つには肖像画にも色々な種類があって、その天子やら皇后やらその偉い家臣・忠臣あるいは偉い社会的に活躍した学者・政治家そういう人の忠臣・功臣、あるいはご先祖さま、夫や妻。しかし子供の肖像画というものはありません。これについては後で触れるチャンスがあれば触れたいと思いますけれども。

(二) 肖像画の社会的役割

というわけで社会的に肖像画が作られた理由は、二番に書きましたけれども、国家的意味での忠臣・功臣の顕彰、褒め称えるということが大きな目的でありました。これは、官製というか権力が行うわけで、特にその最たるものは天子やら皇后の肖像画というのがあります。しかし、これは天子や忠臣・功臣の肖像画というのは、我々庶民からすれば不純な動機で、人民統治のための国家権力の発揚というようないろいろなことが、極めて強かったのではないのか。丁度それは日本が近代国家としてスタートするとき、明治天皇の肖像画をどういう風に描くかと言うことが非常に大きな社会問題とどうか、社会問題だと悪い意味ですけど、その事業があつていろいろな人物画の絵描きがヨーロッパから呼ばれてきた。それはいかに開かれた人民・民衆に接近していく明治天皇の、どうやって民衆に親しみを持たせ、しかし同時に権威を冒すべからざる威厳をどうやって保つていくかということ非常に苦労したらしい。明治頃にはですね。その大きな社会問題があります。あるいは戦争中に我々は、奉安殿というところに天皇の写真が飾つてあるから、その前を必ず最敬礼をして通れと、でそれをしないと上級生やら先生に怒られる、殴られるというような状況があつて、中国においても皇帝の肖像画というものは非常にそういう意味での、国家権力の発揚と言う側面をもつていたんだろうと思います。

これは、私が言っていることではありませんけれども、絵と肖像画というものは、その人間の顔が似ているだけではなくて、精神まで、心のありようまで、人柄まで、根性まで似ている。もう、その絵を見ただけで、涙が出るほど、そういう絵でなければ肖像画ではないということになったときに、皇帝の肖像画というのはあり得るのか、ということ了中国のある研究者が提示している。中国故宮博物院の研究者でしたけれども。どうということかという、今申し上げま

したように肖像画というのは、本当に肖像画は顔が似ているだけではなくて、人柄まで知的水準まで、レベルまで国民のことをどう思っている皇帝であるか、そこまで描くのが本来の肖像画の本質だ。しかも、絵描きと肖像画の目線が対等の目線で描く。後で言いますけれども、できればモデルあるいは像主といえますけれども、モデルと生活を一週間でも十日でも共にして、酒を飲んで飯を喰ってしゃべって笑って、そしてその人柄を把握して絵に描く。そういうときに、皇帝が、皇帝と社会的に絵描きとそういうことはできないだろうと身分の差がありますから、まずできない。仮にできたとしても皇帝がそういう画家の心のそこまで見透かすような目で皇帝を捉えて、そしてそれを肖像画にしたときにその絵描きの命は危ないのではないか。心の中まであらわしているのだから。立派な皇帝ならいいですけど、初代・二代・三代後の天子まではいいけれども、霊帝だの哀帝だのといわれるような、あるいはその酒と女だけの天子が、そういう絵をかかれたときに描いた絵描きの運命はどうなるかということを見ると、皇帝の肖像画なんでおっかなくてかけたもんじゃない。と言う論文がありましたけれども、要するに皇帝のあるいは功臣の肖像画というのが、そういう本来純粋な本質的な意味での肖像画の目的とは違うところで肖像画が描かれてきたというようなところがあるんだと思うのです。

これは僕は非常に面白いテーマだと思うんですけども。さらに偉人・賢人、偉い人を尊敬の念を持って肖像画を描くというのはこれは、心の底からその人を慕うわけですから、多分に美化されるかも知れないけれども、それは僕は違和感をもたいたのですけれども、同時に一番いい肖像画というのは、死んだ友人とか死んだ両親とかご先祖様とかそういうものへの思慕の念に駆られて描く肖像画、描いてもらう肖像画、そういうものが非常に今言った対等な目線というか熱い思慕の念そういうものの素材が活きますから、その肖像画は大変に感動的なものであって、そんないやらしいものにはならないだろう。そういうことを考えているわけです。

明から清にかけてどのくらいそういう肖像画に人々が期待を寄せていたかというのが、資料の二番目に掲げましたけれども、ここに十種類以上の肖像画集の名前をあげてあります。中には多いものは四百人とか五百人の肖像画を集めているわけで、そういうのが現在、中国で残されている明清の肖像画集という版画出版物ですけれども、版画出版ですから線画になってしまっていて、魅力はある意味で限られますけれども。それら数十冊、数十種類残されているというところが、最近出版された本の中で、中国肖像画の全集のようなものが、厚さ七・八センチもあるようなものが、四冊本で昨年度あたり出版されてますけれども、そういうものに収められて、簡単にここに掲げている肖像画全集というのが見ることができません。その数十種類もこういうものがつくられたと言うことによって、いかに明清頃、肖像画に寄せる熱い思いというのが当時の人にあったのかなと、逆に想像されるのですけれども。今申し上げた本『中国歴代人物像伝』というのは齊魯書社から二〇〇二年に全四冊本で出版されています。それに、資料二の肖像画集がだいたい入っていますし、その序文の中で明清の頃に、解説ですが「明清の頃の肖像画集で現在残っているのは数十冊ある」という記載がございました。いかに肖像画が人々に熱い思いを与えていたかということもここからも読み取ることができるのだろと思うのです。

そして、特に資料の一番最後、清の葉衍蘭・葉恭綽の『清代学者象伝』一・二集には三六九人の清代の学者の肖像画が、複製本が出ていて簡単に見ることができます。これはいちいち手で墨で描いていますから、線画ではありません。これは影印本ですけれども、『清代学者象伝』というものが現在出ています。これには、一・二集二冊本で出ております。このうちの一集の方にはですね、葉衍蘭という人が三十年の歳月をかけて一人で肖像画の複製を作って墨絵で描いて、その人の伝記を書いて、それにかかった年月が三十年間かけて作った。清代の偉大な学者の肖像画に接したいという事で、独力で行った事業であります。第二集の方はそのお孫さんが行っているわけで、こちらは二集の方は孫が絵

描きに頼んで描いてもらった。ですから自分が描いたわけじゃなく、お孫さんがやったわけじゃありません。それでも二十年くらいかかっています。こちらの方は伝記がないのです。伝記が作れないのですねなかなか。そういうものがかいに清代・清末の人々が過去の学者等の先賢・偉人たちに熱い思いをいただいていたかということの結果なわけで、まさに社会的には公的権威の発揚から先祖の絵の追慕というか偲ぶための目的、あるいは更に恋人の写真の代わりに肖像画を描くという、もちろんそういうこともありましたが。そういう社会的な需要の中で肖像画が作られてきたわけでありま

す。

この資料のところの故人・先祖への追慕のところを錢謙益の文集を読んでいたら、「亡児寿考壙誌」という五歳で亡くなったその息子の墓誌銘の文章の中の一部なんですけれども、寿考が六歳前のこの文章書いた後に亡くなってしまおうのですが、先祖の四季の祭りや影堂、影堂というのは先祖の位牌やら肖像画を置いてある部屋ないしは場所、部屋建物ですけれども、そこへお父さんが連れて寿考という息子を連れて行くと、先祖の肖像を見ると五歳の息子が肖像画の前でひとりひとり指差して、お父さんに「このご先祖様のお名前は何と申し上げるのですか？」といちいち尋ねる。尋ねただけじゃなくて、その前でじっと立ち止まって、立ち去るに忍びない様子であったという五歳の子供のことについて書いている記述です。結局この子はまもなく死んでしまうのですけれども、そのために錢謙益は非常に嘆き悲しんで詩を作ったり、文章を書いたりしております。

この例を引いたのは、実は資料にも書きましたが、こういう錢謙益のような旧家にはそれぞれご先祖様の位牌やら肖像画を置くための部屋あるいは建物があったわけですね。そこには同時に先祖の肖像画がずらりと並んでいたということを示すわけで、社会的・経済的に余裕がある家では先祖の肖像画がたくさん残っていた。これはつまり先祖様を慕うための行為だったわけで、肖像画の目的とはまずこういうところにあったのではないのか、ということが申し上げたかっ

たわけであります。

(三) 民間における肖像画制作の時期と方法

それでは、肖像画というものはいつ書くのか。肖像画の制作の時期ですけれども、肖像画はいつ作るのか、いつ書くのかということですから。何かの記念の折にというのが一般的で、一番多いのが誕生日などの機会であったと思います。その他、宴会のときだったりしますけれども、誕生日の時、誕生日というのは、今のその僕は孫が生まれて孫の写真好かり撮るのは娘がやっていますけれども、まあ親父の写真好撮らないで孫の写真好撮り娘は撮ってますけどね。今はどこの家でも写真・カメラ・デジカメではお子さんの写真好撮るので夢中だろうと思うんです。特に初めてのお子さんなんかですと。ところがこの頃の肖像画、子供の肖像画は原則的にないようなんです。この頃普通は五十、六十、七十、八十そういう、高齢になった時の誕生日の記念に肖像画を描いて宴会を開いて、場合によっては劇団を呼んで派手にお祝いする。そういうことで寿相というのは長生きの相、長生きの肖像画という意味で寿相。長生きをした時の絵ですから寿相ということになるんだろうと思います。そういうときに作りました。

制作費用は後にして、肖像画を折々作るのはあたりまえだろうと思われるが、実はそうではなくて、そこで制作費用の問題が関わっていて、絵描きさんと呼んできて肖像画を描く。いい肖像画を描くためには、潤筆料と同時に一週間も十日も家に泊めてご馳走をして、しかもお相手をしなければいけない。肖像画を書いて下さいという時、謝礼を払うだけでなく十日も相手をしていなければいけない。よっぽど暇がないとそういうことができないわけです。おまけに家に泊めて、絵描きなんかは贅沢で偉い絵描きになると気難しいですから、接待して酒飲ませて飯を食わせて、しかも相手

をしてそういうことができるのは、相当の金持ちと暇がある人でないといけない。

というわけで、なかなか一般の人ではそういうことはできませんでした。どうするのか、どうするのかあって、死ぬまで肖像画のもてない人というのがいっぱい出てきました。そのうちにそのうちということ、肖像画は金持ちは錢謙益のような金持ちはさっきの話ですけれども、一般の家ではそのうちにお金が貯まったらそのうちにそのうちということ、それが用意できないままいつ死ぬかわからないわけですから、場合によっては若くして死んでしまう。年取ればそのうちに実現しますけれども、三十だ三十五で突然死なれると、まだそんな死ぬはずではなかったし、絵も無かった、おまけにお金もなかったということ、慌てるわけです。慌てて肖像画を絵描きに描いてもらう。白い布を顔にかぶせて急いで絵描きを呼んできて、この遺体を元にして、死に顔を元にして肖像画を書いてくれとやります。そのために顔にかぶせた布を剥ぐって肖像画を絵描きに描いてもらう。そこで死亡直後に描く肖像画を「掲帛」、顔にかけている布を剥ぐるとこういいます。この布の名前を僕はかねがね何というかと探したけれど見つからなかった。たまたま一ヶ月ほど前、小説を読んでいたらその場面が出てきて、この布のことを何ていうと書いてあった。書いてあったけれども、後でメモしようと思っていたら、その本のどこに書いてあるかもわからなくなってしまった。やはりボケが確実に進んでいて、国立大学六十三歳定年、大東文化大学七十歳退休、定年というのは、これはもっともなことであるなあと思いました。その本がどこにあるかわからない、この布のことを何とどう言いますとここで言えるとかっこがいいんですね。講演の席では誰も知らないことをすらすらとこう言うわけですから。しかし、どこにあったかわからないのは、なんども一生懸命さがしたんですけれども見つかりませんでした。僕の弟が坊主なもんだから、あれは何というんだといったら、「そんなの名前しらねえ。」日本語でもわからんし、中国の言い方もこないだ逃してしまった。ですけれども、逃がした魚は二度とつかまらないわけで、当分これは見つからないだろうと思ってますけれども。本にも間に合

いませんでした。ですから、死亡直後にでもまだしかし絵描きをお願いできる人はまだいい方ですよ。急いで呼んで、死亡直後だってこれはまあ、病氣して死んでしまうのですからやつれて見る影もないわけですから、そのまま描かれては困るわけでも、ちろん絵描きはそれを生きてるときのような元気な姿に直して描いてくれます。こっちはまあ、適当な衣服を着けて描きますからこれはどうでもいいわけです。

但し、その時厳しい掟があって、その人の社会的地位やら身分にふさわしい衣服でないと絵描きは描かないのです。金をやったり脅かしたりすれば描きませけれども、そうやって作った、役人どこかの県知事くらいしかないので破られたりしますから、その衣服を着けてかっこよく描くと、社会的非難を浴びて、なんでこんな絵を描いたかというので破られたりしますから、それはできないわけです。しかし技術的には首から下は簡単に描く事ができます。今の葬式のとくに一番先にやることは写真を出せとって、そうして葬儀屋に写真を持って行って、下はどうしますかと、下は和服にしますか、背広にしますかと、いくらでも挿げ替えがきくわけですからね。ですが、それには厳しい社会的な掟があって、絵描きは「像主」つまりモデルさんの社会的地位を偽って描くことはできないわけです。しかし、顔は生前の健康なときの顔に戻して描きます。金瓶梅詞話、さっきの仙石さんの話にありました金瓶梅詞話六十二回に、李瓶児というお妾さんが亡くなる。二十八歳でしたから、死ぬはずではなかったのですが死んじゃった。肖像画がない。これはお金が無くて描かないのではなくて、まだ若いからいいだろうと思っただけで、突然死んじゃった。突然でも半年くらい病気をしますけれども、で、絵描きを呼んできて描くわけです。絵描きは遺体にかけてある白い布を剥ぐって描くわけです。しかし絵描きさんは半年位前にばったり遭って顔を知っていますから、その記憶とそれから死に顔を元に、さらに死に顔でも半年病氣した人ですからやつれている。それをもう少し修正する。そうするとき一族の者が集まって、もう少しあしてくれこうしてくれと注文を付けて描いてます。それが金瓶梅詞話の崇禎本という本の中に

絵が載っていて修正している場面がありますけれども、これは死亡直後ですからまだ描く事ができました。

ところが、費用が工面できて、さあ肖像画を描いてくれというときに、絵描きに払う金が準備できた。しかしもう遺体はない。土葬だから遺体はあるけれども三ヶ月、五ヶ月、一年、三年経てば遺体は腐乱して白骨化してしまいますから、絵のモデルには使えないわけで、その時肖像画を描くということが起こります。こういうのを「追影」といいます。後から絵を描くということで「追影」とこういいます。これはどうするのか、もちろん遺体がありませんから、その時もちろん絵描きさんに頼むわけですけれども、いろんな方法があります。これは、身内、依頼主に頼んで亡くなった人とそっくりさんはいないか、一番いいのは双子の片割れみたいのがいれば一番いいわけで、あるいは一族の者に頼んで一番似ている親族を連れてくる。あるいはその人の子供でもいいから似ている人を探してくる。それで何歳位に仕上げるかということをやります。

これは黄宗義ではなくて、誰でしたかね、ど忘れするんですけれども、明の歸有光です。一五一三年に歸有光のお母さんがなくなりまして、これはどういうわけか、金持ちなんだろうけれども肖像画がなかった。遺体がまだあったはずなんですけれども、そのときは歸有光が呼び出されて絵描きの前に連れて行かれて、鼻から上をこの息子をモデルにして描いてくれ、鼻の下あたりから顔半分はお姉ちゃんを連れてきて、この娘をモデルにして描いて下さいという文章が残っています。これは当然その後修正して周りの人がこれでよろしいということになって絵描きは本番の仕上げをしますけれども、そういうわけで死んでしまった場合には、誰か似ている人をモデルにして描くというを行いました。

しかし、それもいなくなってしまう場合があります。死んで三十年も四十年も経ってしまったって身内もないという時にどうするのかというと、他人のそっくりさんを誰か知っている人に頼んで、亡くなった親父・お袋に似ている人がいないかどこか探してくれということをお願いで、そして絵描きに頼んで描いてもらう。そういうことをやります。中には

死んでから十年・百年、もう知っている人はほとんどいなくなってしまっていて、百年前の人の肖像画が必要になってくる事があります。これは、検証するためとかでやるわけだから、その時に特殊技術があるらしくて、中には生きているのだけれども犯罪人が逃亡してしまって、犯罪人を捕まえる、今のモニタージュ写真だか警察の似顔絵の手配用の絵を描くと同じことだとおもうのですけれども。しかし、そちらはとても科学的なんです。中国の場合は逃亡した犯罪人の肖像画だけでなく、周りの風景も描けということを地方の権力者が絵描きに命令する場面があります。まあ、見事それを書き上げてその肖像画が元でその犯人が捕まるという記録が、記録といっても小説ですけれども清の宜鼎の『夜雨秋灯録』の中に出て参ります。これは逃亡者逮捕に警察の似顔絵班がやる、似顔絵のようなことをやるわけですから。似顔絵の絵の場合は情報があってやるわけで、情報を集めて作り上げますが、今言った逃亡者の写真という情報は一切なしでやってました。どうやってやるのかということは、私の企業秘密で七十過ぎて学校を辞めたときの生活の糧にしたいと思いますので、本日はこの辺でご勘弁させていただきますのですけれども。どうやって描くのかということとはですね、一般論的にはある種のマニュアルがあります。そのマニュアルは実は複製本がここにあるんです。この『追容像譜』というもので資料集にもあげてあります。資料三番の下のほうですけれども、資料三番の▼印の死後年月がたち遺体がなくなったとき、追容の法という方法があります。追容の法のための手引書として、故人の肖像画作成の手引書として『追容像譜』というのがあります。

これは、そこにも書きましたけど、一九五〇年代の終わり頃に南京の画家の王沸達という人が一九五八年ですから、中華人民共和国成立直後のことですけど、その古本屋から肖像画冊を手に入れました。そこには男女の顔が三百図描いてありました。この全容はまだ見ることができません。僕は見たいと思うのですけれどもこの複製本はできていないらしい。但し、これの半分位、三百図の三分の二、百九十八図が「漢声雑誌」という台湾で出版している雑誌がありま

す。この六十三・六十四期に『中国民間肖像画』という特集があってその中に『追容像譜』、これですけれどもこんな具合で顔が全部で三百位あるんですね。男・女・壮年・青年、青年は少ないのですが、壮年・老年があります。つまり、死んだ祖父さんの肖像画を描いてくれ、少しお金が貯まった、その時にこの本を見ながらですね、顔はだいたいこんな格好で、年齢は幾つぐらい、男、眉毛はこの絵、鼻はこの絵、耳はこの絵、口はこの絵とあって、モニタージュ写真を合成するみたいなもので、そのための手引書というのがあったということが三、四年前に私は気がついて、そして、それを使っているんだということがわかりました。

これは、小説をやってますとそういう場面がいっぱい出てくる。追容の法で絵描きさんに頼んで描いている場面があるんですけども、たぶん手引書みたいなものがあって誰かが指図しながら描いているのはわかるんですけども。僕が研究しているのは小説の中の肖像画の実態を調べようとしているのに、小説を使ってやっているのではあんまり意味が無いなと思って、小説以外の何か随筆であるいはそのためのマニュアルとは思わなかったんですけど、何か小説以外の材料で、先ほどの仙石さんは小説やるときに、族譜を使うことを考えましたけれども、小説から一旦離れた資料を使って小説研究の客観性を高めようとやっているわけですけども、僕も同じように小説のなかの肖像画の現象を調べるのに別の小説を持ってきたのでは、やっぱり迫力に欠けるから、何かいいものがないかと零細な資料を探してきました。こんなにどんぴしゃりの資料が見つかるとは実は思っていなかった。そう思って悩んでいたときに、この三山さんとおっしゃる中国版画史を研究していらっしゃる人にこの話をした所、「そういうマニュアルのようなものがあつたはずだ」こういわれて、その人は突然にこう聞かれて手持ちの資料もないもんですから、本の名前も出版社も何にも記憶にないまま僕にそういった。僕はその翌日中国古典小説研究会というのが福岡であったもんですから、仙台からその次の日福岡にいったちゃったんです。彼女に後でじゃあ本の名前と著者と作者と出版社を教えてくださいということ別れて、福岡

に行って会場に行く前に、福岡の中国書店といういろんな本を持っておられる本屋さんがあって、そこへ行って今のよ
うな話をしたら、「なんかそんな本見たことがある」と社長が言うわけですね。いろいろ探ってきて最後に「これです
か」と一冊持ってきたんですよ。まさに奇遇で聞いたその翌日、その本屋さんに本の名前も何にもわからないで、ただ
内容だけでうる覚えで話したのが、これでしようかと取り出してきてくれて、まあ僕はびっくりしてこれで僕の研究は
決まるなあということではびっくりしました。もう、研究会出ないでそのまま帰りたくなっただけでね、やっぱり出
席するといっている手前、帰るわけにいかないし、みんなに見せようと思ったんだけど、見せると先に業績を盗まれる
から、見せないでどうやって興奮を抑えるかというのがね、あんなつらくうれしい思いはなかったとは言わないけれど、
それくらいうれしかったです。しかし、なかなかその後紆余曲折あってうまくいきませんでしたけれども、そういうも
のを使って今は存在しない人の肖像画を描くという方法があります。

(四) 肖像画と文学の接点

ところでこの四番目の肖像画と文学の接点はどこにあるのか。中国では肖像画が社会的に必要である。これはもう二
番の所でちょっと飛ばしましたけれども、誕生日のお祝いあるいは葬式の時も不可欠です。日本の今と同じです。遺影
を掲げますから。忌日・命日・お祭りの時、さらに四季のお祭りにも肖像画の前に一家の主人が家族を連れてその前に
拝礼する。そういう習慣が一定程度の社会的地位のある家では行っていました。そんな生活の余裕のない人にはもちろ
んありえないことですけども。それで、そういう時にですね、逆に肖像画がない人は四番に戻りますけれども、肖像
画がない人は非常に困るわけですね。よその家では年中行事にあるいは命日に、人の祭りで時に年末年始が一番重要で

すけれども、その時に肖像画を出してそしてみんなでお参りをします。ところが肖像画がないというのは非常に社会的にも非常に困るわけです。ですから、何とかして肖像画を手に入れたいということが必要になってきます。それから、当然それはお祭りという形式的な問題じゃなくても、ご先祖様にお目にかかりたい、ご先祖様はどんなお顔をしていたらよかったか、あるいは亡くなったお父さん・お母さんに会いたい、そういうえば恋人になんかの場合もあるでしょうけれども、恋人の場合については小説・戯曲では非常にたくさん例がありますけれども、それ以外の資料というのは恋人に関してどのくらい人々が肖像画にこだわったかという例はなかなか見つからない。これこそ、一番先に調べたいところなんですけれどもないわけで、やはり中国ではご先祖様に関する肖像画のことがたくさん記録には出てまいります。

そのご先祖様の肖像画は古くなってボロボロになってしまふ、あるいはあればまたそいつを更新します、書き直します。別の絵描きを頼んで書き直す。場合によってはもっと古くなると初代・二代・三代・四代と夫婦の像を一枚の絵に収めてしまふ。絵描きを頼んで一枚にまとめてくれと。三代図・五代図と大きな肖像画がつくられるようになります。それだって一定の年月が経てば、虫食いになりますから更新していく。その場面がいろんな文献に出てまいります。その時に肖像画がないことに対する悲しみ嘆きというのが文学作品の中に非常にたくさん出てまいります。

四番の肖像画と文学の接点、一つには肖像画を見るとみな肖像画に限らず写真もそうですけれども、やっぱり恋人の写真を見て思い出す、孫の写真を見てニヤっとはしないけれども持ち歩く。僕は持ち歩きませんけどね。そういうはしたないことはしませんけどね。やっぱり、二枚三枚もっている人いますよ。人の息子の写真、孫の写真見せて、なんで僕はよく人に見せられるけれど、そんなのは見たくもないですよ。だけでも、やっとそういうことの意味がわかってきましたけれども。そういうふうに写真があるとその人が目の前にいるような錯覚にとらわれる。やはり肖像画を見ると、いい肖像画を見るとやっぱり昔の人はびっくりして生きているようだ、息、呼吸をしてないだけで生きているようだ

という表現が小説の中に出てきます。

金瓶梅の李瓶児の絵が出来上がってきた時にみんなびっくりして、これは息をしていないだけで生きているときにそっくりだという表現がありますけれども、まさにこれが絵描きに対する最大の誉め言葉であり、みんなが期待するのはやはりよくできた絵を見て感動を覚えるということが肖像画の一番大事なところで、その感動性が詩文の実は元になっている。詩文の元になっているという意味は、一つは文学的な動機付けというだけではなくて、実際に肖像画を見て感動して詩を作る、あるいはそれをもとに小説を書く、材料して小説を書くという即物的なところまで、しかしその背後にはそれに対する感動性はもちろんあるわけですから、それがその肖像画が文学につながっていく一つの接点だろうと思います。

それから、もう一つの接点というのは、肖像画があればそういうことができるわけです。眺めて故人を偲んだり、遠くにいる恋人を思い出して会いたい会いたい、あるいは近くにいるような思いに駆られる。そういう精神的な心ときめきというか、動きが一つあるわけですけども。そうではなくて肖像画がない人はどうして家にご両親の肖像画がないのか、よその家では盆暮れ・年末年始あるいはご命日に先祖様のお参りをして、そうして場合によっては話をしたり、先祖様とお会いできるのに何で俺だけ肖像画がないのか。それを非常に嘆き悲しんでなぜこんなことになったのか、それが今日想像できない程、激しい精神的なショックを受けています。

例えばこの今日の資料の四番のところです。肖像画へのこだわりというところで、杜濬という人がいますけれども、杜濬は一六一一年〜一六八七年の人ですが、この人の『変雅堂遺集』の中に、お母さんの肖像画がないのを大変に悲しんでいます。お父さんの肖像画はいっぱいあるんですよ。ところがお母さんの肖像画がない。これはお金もあるしお母さんは長生きした人ですからチャンスはいくらでもあった。そのために息子の杜濬が「お母さん、會鯨という、これは

最大の肖像画描きで會鯨が家に来てくれたからね。會鯨に頼んでお母さんの肖像画を描かせてくれませんか。會鯨は老人だから、お母さん会ったっていいでしょう。」と言うと、お母さんは「いや、女が他人にジロジロ顔を見られ、見つめられて、こんな恥ずかしいことはない。そんなことはできないんだ。」「こういっちゃ何ですがお母さんももうお年ですし、會鯨だって立派な絵描きですからね。いいでしょう。」「年寄りならそういうことをしてもいいんですか。聖人さまはそういうことを仰らなかつた。お前が私の肖像画がないことにこだわって、大変悲しんでいることはよくわかります。よその家でも肖像画があることはわかります。けどね、私は他人に、男に顔をジロジロ見られるなんてそんなことは許せません。肖像画は私はいららないんだ。」でも、彼が粘るんですが、「そんなにね、お母さんの肖像画がないからお母さんを後で偲ぶことができない、思い出すことができない。というようなのは本当の親孝行者ではありませんよ、本当にあなたが親孝行したのであれば、私の肖像画がなくなつたって私のことを思い出せるはずだ。」頑として聞かないんですね。とうとう肖像画がないままお母さんは亡くなっちゃうんですよ。そのときこの杜濬がいうには「ああ、俺は何で、自分で肖像画の勉強をして、そして自分でお母さんの顔を描かなかつたのか」ということをずっとこだわつた。そのことを『麥雅堂遺集』の「白雲図に題す」白雲図というのは子供が、親を思う意味ですけれども、そういう文章の中に出てまいります。

まさにそれを地でいったのが、清の兪蛟の『夢厂雜著』の中に「閔の孝子伝」というのがあります。この人は家が貧乏で肖像画がありませんでした。物心ついた時にはもう両親は亡くなってかなり年代がたつて、子供の時に両親が死んじゃっているから顔の記憶がないんです。そうして、近所の人に追容の法でもって描いてもらうように頼むんですけど、絵描きがへたくそで、なかなかうまく描けない。自分が今度肖像画を描く練習をして、もう大変な努力の結果、上手な絵描きになりました。そうして、モデルがない。知り合いの人に頼んでお父さん・お母さんにそっくりな人がい

たら教えてくれと。まあ兄弟が誰もいなかったんです。ところが村の人々は彼がねあんまり、「お父さんお父さんお母さんお母さん、そっくりさんがいたら探して頂戴」と言うもんだから、バカにしてからかって騙したりする。あんまり親孝行なんで、しょうがないから一回「お前のお父さんお母さんにそっくりな人がさっきその辺を歩いていたぞ」とことう言ったら、彼が夢中になっておっかけていって、果たしてその人が見つかった。そこで家に連れてきて描きました。そうして、描いたとたん忽然とこの二人が消えてしまった。実は彼はかねがね観音様に一生懸命にお祈りをしていた。一種の観音靈験談でもあるんですけれども、そういう話が『夢厂雑著』の「閔孝子伝」の中に出ております。彼は自分が修得した絵画の力でもって立派な両親の絵を描いて、彼は大変有名な肖像画描きになりました。

これは小説だと思っていたところが、それから一・二年して、これが実は中国清代の書画の記録の中に実は閔貞という人が実在していて、そして大変な絵描きでしかも庶民的な絵を描く人で、その絵が二枚三希堂画報に残っています。牛飼い、水牛飼いの少年を描いたり、武芸者を書いたりしたんですけれども、その実在した人物で清の謝堃の『書画見聞録』やら清の泰祖永の『桐蔭画論』、『清稗類鈔』その他今の話が実は載っております。その位まさにその杜濬が、何で俺が肖像画を会得しなかったのかということとつながる話で、まあこの小説みたいな話もこれはそういう中国における肖像画へのこだわりの一つの表現として、あるいはそれほどまでにこだわったんだということとつながって行く現象だと思って、僕も両方見比べてびっくりしたんですけれども。そういう風に肖像画が、いかに肖像画が必要なものであったか、ない人はいかにこだわったかということが、いろんな記録に出てまいります。葉紹袁は娘が小鸞でしたかね、二番目の娘が才媛であちこち記録がありますけれども、娘の肖像画がないっていうのでこだわったり。黄宗羲もです。お父さんの肖像画があったんですが清末の、清朝が進軍してくると、黄宗羲の弟が反清朝軍の抵抗運動に参加したりして、その家の財産が全部没収された時に、両親の肖像画まで全部持って行かれちゃったという記録があって、また

その後それは手に入ることがあるんですけど。その間の記述したのがあって、いかに彼がやっぱり両親・一族の肖像画にこだわったかという記録がございます。そういうこの文中や詩文集を見ているとたくさんそういう記録が出てまいります。

というわけで容易に肖像画というのは文学に結びつく、それ自体その関係者の今の兪蛟の話は、これはまさに「閔孝子伝」の話は小説風の文章になっていますから、肖像画の持つ感動性ないしは肖像画へのこだわり、それが文学を生んでいくということは容易に考えられることでもあります。

(五) 明清文学と肖像画―肖像画は明清文学の諸ジャンルに浸透していた

具体的に文学作品にどのようにそれがでてくるのかというと、この五番の所で肖像画が明清文学にどの様に関わっているのかということを眺めますと、小説・戯曲あるいは詩歌あるいは画賛、そういうところに実は非常にたくさん肖像画が出てきます。まあ、小説は比較的少なく『西京雜記』の王昭君が一番古いんですけど、『太平広記』に載っている『聞奇録』の「画工」という物語があります。これは資料集の上の、右上の所に書いてあるのがその話の絵画化したものですけども、これが肖像画から抜け出してきた真真という女ですけども、肖像画から名前を呼んだら出てきたというやつで、「画工」をはじめこの『小豆棚』の「黄玉山」という、これも絵の中の、女の絵に向かって名前を呼んだら現れてきたというそういう話を元にしていますけれども。後、お芝居では非常にたくさんあって、もう説明するまでもないのですけれども「漢宮秋」はこれは王昭君の物語で、「梧桐雨」は玄宗皇帝が楊貴妃を偲ぶ、これは非常に肖像画が重要な役割を果たしている。「琵琶記」は肖像画を背負って夫を訪ねていく、死んだお母さんお父さん

の肖像画を自分が描いて背負って夫を訪ねて行くなど、「燕子箋」「牡丹亭」「画中人」「療妬羹」「玉騷頭」その他、これ以外の王昭君関係の戯曲がたくさん作られますけれども、その中にも肖像画が出てくる。中にはその肖像画の描き方の中に人相術が入り込んでくるという面白い話があって、昔は王昭君は賄賂をやらなかったために絵描きに美人に描いてもらえなくて、元帝の寵愛をもらえなかった。それで、モンゴルからお后にいつてもらわれた時に、王昭君を推薦したらそれが一番の美人であった。それは絵描きが王昭君を美人に描かなかったからとこうなっているわけですけども、ところが明清の肖像画になると王昭君が絵を描くんじゃなくて、王昭君が賄賂をよこさないために、絵描きさんが一千両の賄賂を寄せ、賄賂をやらなかったために絵を描いてくれない。絵を描いてくれないから王昭君は自分で自分の絵を描きました。絶世の美人なんですけども。それを見た絵描きがこの絵をもし天子に届けたら、お気に入りになるから何とかしてこの女を排除しようと思って、やった方法が左目の下に墨を付ける場面があります。ここにホクロのある女は亭主を早く死なせるといふ印、人相なんです。左目の臥蚕という専門用語を使えばですね、我らの業界用語を使いますと臥蚕という眉毛が蚕を横たえる臥蚕。ここにホクロかアザがあると夫を早死にさせる女の人相。だからそういう男と結婚しないようにお気を付け下さい。これは昔の『西京雜記』にはそんなこと言っていないのです。清代の和戎記というお芝居になって元曲の頃から出てきますけれども、元から和戎記の頃になって王昭君のこれが出てきます。人相術が肖像画に入り込んで、そしてお芝居にも入り込んでいる。そういう面白い例ですけども、これは元曲の頃から入り込んできたんだと思うんです。和戎記には絵まで入っています。というわけで、戯曲にはこれだけたくさんあって、このほかにも和戎記などその系統もいっぱいあります。

この中で代表例が「牡丹亭」ということであります。「牡丹亭」というのは誰でも知っている大変有名な戯曲ですけども、後でちょっと触れたいと思います。それから、次の詩詞の中では、馮惟敏、全明散曲の中にありますけれども

「六秩写真（六十歳の肖像画）」あるいは施紹莘の「先君百箇日の感懐」という散曲があります。散曲というのは元民時代に流行った口語性の強い歌曲ですけれども、その散曲。それから、図贊、絵には必ずといっていいくらい詩文が書き込まれます。特に肖像画に書き込む詩や文を像贊といいます。

この像贊は肖像画に直接書き込むですよ。そうではなくて肖像画を見ながら書くのは題像詩。ですから必ずしも肖像画に書くのではなく、普通の野紙か何かに書くわけですけど。題像詩そういうものがたくさん残っています。特に像贊・題贊というのは詩文集では像贊の部というのがあるくらいで、明の楊士起には八十種類の像贊が残っています。徐渭には三十九首残っています。錢謙益には六十八首残っています。李漁の『一家言文集』という中に「わしは十日間に六・七首も題像詩の注文があって忙しくて大変だった」という記述があります。十日間に六・七首の題像詩の注文があったということです。当然彼は文筆業で生活していますから謝礼をもらえるわけで、忙しければいいわけですけれども、あんまり忙しいと、やっぱりみんないい加減まいっちゃいます。あんまり忙しいので嫌になったよと。この時の像贊の謝礼が幾らであったか、一首作るごとに幾らであるのか、相場はどのくらいであるのか。それを一生懸命探しているのですけれど出てきません。たまに幾らっていうのがありました。それは省略しますけれども。題像詩をつくって、「今日は題像詩を書いてくれ」と依頼があって、「いやあ、今日は俺忙しくって」「バイトがあるんだ」「いやバイトがあるっていても、仕事があるから忙しい」「お前、題像詩書けば十両になるのにそれでもやらないのか」そんな会話がお芝居の中に出てきましたけれども、そういう零細な資料を集めるとだいたい相場がある程度わかると思いますけれども、なかなかこれは大変です。

それから笑い話には大変たくさん肖像画のことがあります。ここに明の馮夢龍の『笑府』の中に載っかっている例を二つあげました。「婆像」女房の肖像画。ある恐妻家が、女房が死んで、その肖像画が靈柩の傍らに掛けてあるのを見

て、普段いじめられていますから、うっぶんを晴らしてやろうと思って拳をふりあげて「このくそ婆」と殴ろうとしたら風が吹いてきて、肖像画がゆらゆらと揺れたんでびっくりしてしまって「いやいや、今のは冗談だ。」死んだ女房の肖像画でも恐いという題名を付けるべきだろうと思うんですけど。もう一つついでに、無名氏の『笑苑千金』の中に出てくる「水を画像に嘸きかける」という話。あるところに奥さんを大変恐れている男がいました。友達から「そういう時はな、奥さんの肖像画を描いてな、こっそり部屋の中にぶら下げて毎朝水を吹きつけて、お前なんか恐くないお前なんか恐くないというとね、いいんだよ」と言われて、それを始めました。ところがそれが女房に聞きつけられちゃって、「あんた、何やってんだよ」と殴りかかられた。彼はびっくりして「まだ俺はおまじないが終わってないんだ、その続きを聞かないで何を怒っているんだよ。」そこで女房は「その続きは何て言うんだ」と。夫は「お前なんか恐くない、恐くないと言ったら、いったい誰が恐いんだよ」と言う話。など含めて肖像画はこういう恐妻家の話はたくさんあるわけで、この明清の文学の非常に大きな題材になっていて、これは本来男尊女卑の社会であるはずなのに、そうでない社会を持つおもしろさというんですかね。非常に大きなテーマになってますけども、ですからこれは笑い話だけにある現象ではないし、肖像画だけが恐妻家の話を題材にするわけではありませんけれども、そういう恐妻家の文学の一環を形成するということになっていると思うんです。

つまり、小説・戯曲それから詩、それから笑い話、文学のほとんどのジャンルの中に肖像画が非常に重要な、少なくとも題材にはなっている。単に題材だけではなくて、それがなくとその作品が成立しないような、「牡丹亭」なんて肖像画のことを抜き去ったら「牡丹亭還魂記」という作品は存在し得ないだろうと思うんです。そういう作品がたくさんあります。私はそういうのを肖像画文学ということにして、今まとめたのは中国の肖像画文学とはそういう趣旨なんです。

(六) 明清文学における肖像画の意義

それがこういう肖像画が明清小説に浸透していたことから言えば、もう少し肖像画とはどういう文学に意義を与えたのか。という最大の意義というのは、やはりまごころというか「真心」というか、人間の心の尊重、心が大事なんだというのをこの肖像画文学というのは主張していることになるのではないかという風に考える。つまり、さっき言った通り「画工」というのは一生懸命に向かって朝晩呼び続けたり、絵の中から抜け出してきた結婚してくれて子供を産んでくれたというのは、この唐の無名氏『聞奇録』『画工』、これは『太平広記』にのっかっている話ですけども、絵の中の女の真真という名前を呼び続けたら、絵から抜けだしてきて奥さんになってくれましたと。後日談があるのですが省略します。これがさっきの図です。それから、『牡丹亭還魂記』、略して「牡丹亭」あるいは「還魂記」これは、杜麗娘は夢の中の青年に恋いこがれて死んでしまいました。三年後に夢の中の青年柳夢梅が彼女の自画像、自分で描いた肖像画、杜麗娘が残した自画像を手に入れて、その名を一生懸命呼び続けました。その結果彼女は生き返って、死んでから三年後ですけども、「私を棺桶から掘り出してちょうだい」と言って、それで彼が棺桶を掘り出します。二人は結ばれましたというのが、下の右二枚の部分です。しかし、このお芝居は、非常に無理があつてこの当時から問題があるわけですけども。お父さんもですね、この青年が杜麗娘を連れて「お父さん結婚を許して下さい」と言って行くんだけれども、「三年前に死んだ娘が生き返るとは何事であるか、そんなバカなことがあるか、お前はだいたい娘の墓を掘り返したんだらう」と。これは当時、お墓・棺桶というのは無断で、政府のお役人の許可を得れば別ですけども、無断で開けたりしますとこれは極刑に処せられますから。危うく彼は一命が危ないところだったんですけども、科擧の試

験でトップに合格して天子が二人を結婚させようと言った。こういう結びになって、最後こういう結びをこういうところに持っていかざるを得ない社会状況があったというのは、やはり当時の小説の限界だったと思うんですけれども。それは余談です。

それから、今の下の絵のところ、右側は柳夢梅という青年が拾った肖像画、杜麗娘の肖像画を掛けて、一生懸命朝晩呼び続ける。そうしたら、死んで三年目の女だったんですけれども、棺桶から魂が抜け出てきてやがて体も出てきて、呼びかけに応じて杜麗娘が現れたのが、左側の図の場面で、雲だかドライアイスみたいなものに乗っかって、あの世から現れてきたそういう場面です。

それからもとへ戻って、明の『画中人』これは、「牡丹亭」の焼き直しです。ですがちょっと違って、揚州の庾啓という人が理想の女性を絵に描きました。これは全く空想の女性を絵に描きました。ですから、本当は肖像画じゃないわけで、架空の女性ですから、これは美人画だということになるわけで、実在の人間の姿だったら肖像画ですけれども、架空の人間の美人画、あるいはいっても固有名詞を伏せた、その辺は誰の肖像画かは問題じゃない。きれいな女というだけで美人画なわけですけれども。これは美人画だったんですけれども、これとそっくりさんがいましてね。かれがその女の名前を知って、自分が架空に描いた女の、しかも架空の名前じゃない。これは仙人が教えてくれたんですけれど、道士が教えてくれたんですけれども、揚州の庾啓という人が描いた理想の女性を、鄭瓊枝という女を仙人に名前を教えてもらおう。ところが実際の人間でした。彼が一生懸命に鄭瓊枝の名を呼び続けると、彼女の魂が吸い取られるようで、ふわふわと精神異常のようで、彼女の魂が吸い取られて仮死状態になってしまいます。死んだと思った両親は、急に赴任することになった、転勤命令が出て転勤する。その途中のお寺に預けました。しかし、彼女の霊魂が姿を現して彼に接近して、「私はここに居るから棺桶からは是非出して頂戴」ということで彼女の棺桶を開けたら、彼女は生き返って二

人は結ばれました。という、これは杜麗娘の「還魂記」の焼き直しであります。二番煎じといえは二番煎じなんですけれども、しかし三年前の女性が生き返ったというのに比べて、これは遊離魂というか魂が吸い取られたという話は中国ではよく伝統的にある話ですけれども。それと遺体がまだ仮死状態だったという形に物語を作り直しております。

そういうわけで、中国における肖像画文学の一つの頂点というのを「牡丹亭」および「画中人」というのが作り上げている。まあこれは、「画工」唐代の『太平広記』の物語からずっと連続する肖像画文学の一つ大きな流れだと思っておりますけど。肖像画文学には二つの流れがあって、一つは王昭君ものの流れがあって、これが現実の人間の死んだ人間を肖像画をみて偲ぶというきわめて現実的な話。もう一つは、絵の中の女に向かって呼びかけたら出てきて、あるいは死んだのが生き返って結婚してくれたという、きわめて幻想的・空想的な話。この大きな二つの流れが肖像画の二大源流、二つの流れだと思つて、そういう風に本には書きましたけれども、この二つの流れがあるんだろうと思つてます。

締めくくりになりますが、最後に補足資料をご覧になっていただきたいと思います。この明清文学にとって肖像画というものが、いろんな題材を文学のあらゆる面に提供してきたという意味で意義があると思ひますけれども、更に言えば、今申し上げた通り、「牡丹亭」を例にして言えば死んだ人間が、三年前に死んだ女が生き返つて結婚する。というなんてアホなという形にはなっていますけれども、しかしその内面には、物語の内部には人間の心情・愛情、突き詰めた心が大事なんだ、ということの主張がそこには厳然としてあるわけです。

どういう言葉で言っているかという点、あちこち飛んですいませんけれども、最初に配った資料の方の絵のあるところをちょっと見てください。両方ご覧頂きたいのですけど、絵のところの六の真ん中辺りに、「牡丹亭」の湯頭祖の序文みたいなのが「牡丹亭」の伝記の最初についています。『牡丹亭』湯頭祖題詞と書きましたけれども、「情の動きとは非常に奥深いんだ。どこからきたのかわからんけれども、しかしその作用というのは非常に大きいんだ。情の働きと

というのは死んだ人をも生き返らせることもできるんだ。あるいは生きている人間を愛情のためならば死なせることもできるし、逆に死んだ人間を生き返らせることもできるんだ。もし、そういうことができないんだとしたら、その心、愛情というのは本物ではないんだ。」とそういうことを言っています。大事なものは、至情・真情こそが大事なんだということを書いてあるわけです。

「画中人」の本文の中でも、もっとはつきりと言っているわけで、ここには第二十八幕を挙げましたけれども、第五幕のところここにはあげませんでした。道士がいう場面があります。「世の中には人間の情だけが大事なんだ。本当の情があれば、離別している人間でも会えるし、死んだ人間も再生させることができる。生き返らせることができる。真心さえあれば、愛情があれば死んだ人間だって生き返らせるんだ。あるいはそのためにも自分も死ぬことができるんだ。」という、これはさっきの『牡丹亭』の題詞と同じ趣旨なんです。それから二十八幕。引用しましたけれども、「あなたの真情が私を感動させて、魂をあなたのもとへ抜け出させたんですよ。」それに対して、「いやあ、人間には情さえあれば、死んだ人間も生きた人間も違いがない。」つまり、そこで庾啓がね「あんたは死んだ人間なのか、幽霊なのか」といったら、女が「私は幽霊。あなた怖がらないで下さい。怖いですか」「怖くない怖くない、情さえあれば生きている人間も死んだ人間も違いがないよ」そういう場面があります。

これが、『牡丹亭』あるいは『画中人』を貫くものですね。もう一枚の補足資料の方に、今のところ僕はまだちょっと整理不十分だったのでもう一回書き直したのが補足資料のところ。真情が大事、真心が大事、真の愛情が大事なんだという主張は、李贄の童心説というものと、この流れとつながっていく。その流れを継承するものだろうと思うんです。李贄は童心こそ大事なんだ、真心こそ大事なんだということ。これを当然主張していることはみなさんご存じのことです。それをまさに馮夢龍の油売りの話、「世の中の金持ちのぼんぼんには真心がないんだ。秦重さんは

しがない油売りで貧乏人だけれども、そういう人こそ私の理想の至誠のお方なんだ。私は金も名誉もいらぬ。この人と結婚するんだ。」そういうのがまさに『醒世恒言』ですけれども。馮夢龍先生は『牡丹亭還魂記』を改作して、作り直しているほど『牡丹亭還魂記』のファンでありました。

それから、当然これは『紅樓夢』の世界とつながっているわけで、『紅樓夢』の最初のところで、「滿紙荒唐言、一把辛酸淚」という大変有名な文句で、『紅樓夢』という物語は全編ででたらめなんだ、しかしながら物語の世界そのものはでたらめだけど、その内部、その本質的には辛い悲しい涙の世界であって、そこには真実があるんだ。そういうことを言っているわけで。同様に『紅樓夢』第一回で、偽物が本物になるとき本物がまた偽物になる。偽物が本物になる。いっていることは荒唐無稽な『紅樓夢』の世界は荒唐無稽な世界なんだけれども、しかし、その荒唐無稽な物語の中に、人間の真実というものがそこにあるんだ。そういうことを言っているわけで。肖像画が文学作品に持ち込まれる。しかも、肖像画文学の二つの流れの、絵から人間が抜け出すという虚構の虚構ですけれども。その文学の虚構性を非常に肖像画文学が強調して、強化しているという風に言えると思うんです。

つまり、この世の中の合理的な現実を超えた、超えたところにある内面の世界、合理的な日常的な合理性を超えた、あるいはその背後にある、その内的な真実、それが大事なんだということを『牡丹亭』は言っているんだと思います。すると、この『牡丹亭』というのは李卓吾につながるし、李卓吾以来のそれを尊重する馮夢龍やら『紅樓夢』の世界、そういうものの流れの途中に位置し、それを補強化していくという役割、効果を『牡丹亭』というのは発揮しているのではないだろうか。それは文学史的に言えば、こうなるんだらうと思いますけれども、今日的な視点から見るといわば架空のおとぎ話であり、漫画的な世界、おとぎ話的世界ですけれども。

今日からみると非常に豊かな幻想的な世界というのをそこに築き上げている。舞台装置は現実なんですけれども、物

語のそのものの構成が作り話であって、それが非常にファンタジックで幻想的な世界、というものに作り上げられている。という意味では、中国の過去の思想がどうであるというのがわからない人が見ても、『牡丹亭』の幻想性ということについてはご理解いただけるんだろうと思うんです。今日的な言い方をすると肖像画文学は中国文学により豊かな幻想世界というものを築き上げる役割を果たしたということも言えるだろうと思うんです。本日溝口先生がいらっしゃるとは思わなくて李卓吾のことを結びに持ってきてしまって、これはちょっと忸怩たる思いですけれども、しかし信念を貫くためにはここで頑張らないといけないと思って、敢えて原稿を変更せず申し上げた次第でございます。長い間、早口で趣旨がどうもわかりにくかったかもしれませんが、ご勘弁いただきました。ご静聴ありがとうございます。ご静聴ありがとうございました。

平成十六年十月二十三日 退休記念講演録

※一般講演の為、本稿のみ新字体といたしました。編集委員会